

氏名(本籍)	安藤 嘉則 (神奈川県)		
学位の種類	博士(仏教学)		
学位記番号	博仏乙第15号		
学位授与の日付	令和2年3月19日		
学位授与の要件	学位規程第5条第2項該当		
学位論文題目	中世臨濟宗における公案禪の研究		
論文審査員	主査 駒澤大学教授	博士(文学)	角田 泰隆
	副査 駒澤大学名誉教授	文学博士	石井 修道
	副査 駒澤大学教授		佐藤 秀孝

論文内容の要旨

1. 本研究の目的とその意義

本研究は、中世臨濟宗の林下に位置づけられる大徳寺派・妙心寺派・幻住派の各派の公案関係の文献(密参録や語録抄等)を主たる研究対象とし、松ヶ岡文庫(鎌倉市)をはじめ、各地の寺院・資料館等に所蔵される写本をできる限り網羅的に調査し、諸写本を系統別に整理した上で、それらの文献の意義について考察する。また、拈香・陞座といった在家も対象となる仏事法語なども併せて考察する。

これまで日本禅宗史研究において公案関係の文献、とりわけ臨濟宗の密参録・密参帳といった文献を研究対象とすることはほとんどなされていなかったといえる。それらは公案の秘訣を記した特殊な性格を有する文献であるが故に、公案に参ずる者にとって、それらを研究対象として扱うこと自体が憚られるからである。

しかるに昭和18年、鈴木大拙氏によって密参録(特に円覚寺黄梅院の古帆周信の密参録)が紹介され、同氏はこれを変態禅として批判した。しかしその後これに続く研究はなく、昭和49年に金田弘氏が発表した松ヶ岡文庫の抄物資料の調査目録によって、初めて密参録ないし密参帳なる文献が多数存在することが明らかとなった。こうした国語学の中世口語資料研究を皮切りに、中世禅宗史研究の立場から飯塚大展氏らが密参録を紹介・研究するに至っている。

本研究では、こうした先行研究をふまえ、中世臨濟宗の禅林において、いかなる公案関係資料が成立していたのかを確認し、その文献的特質を明らかにするものである。こうした中世林下の公案禪を明らかにすることは、今日の臨濟禪、すなわち近世に成立した白隠禪を考える上でも重要な意義があるといえる。すなわち白隠禪は中世の公案禪のどのような伝統を受け継いでいるのか、また白隠禪が新たに確立したものは何であったのか、という問題を考察するためには、そもそも前時代の林下の公

案禅の実態が明らかでなければならぬからである。

2. 各部各章の概略

第一部「中世禅宗の密参録文献の研究」

第一章「大徳寺派の密参録文献について」

大徳寺派の公案禅について、筆者は松ヶ岡文庫に所蔵される公案関係資料のうち、大徳寺派の公案体系を明らかにした写本（ハ・1070）を見出し、その写本を手がかりに、当時の大徳寺派が参禅の対象にしていた公案群が、「百五十則」・「碧巖百則」・「碧巖類則」・「雲門百則」・「大燈百二十則」、「雑古則」であったことを明らかにした。かつ現在松ヶ岡文庫等に所蔵される多くの大徳寺派の密参録の写本が、この大徳寺派の公案体系の枠組みに位置づけられることを確認し、諸写本を分類整理した。またこの公案の枠組みに基づいて、近世初頭の江雪宗立・江雲宗龍等が会下に対して行った参禅資料を見出し、実際の大徳寺派における公案参究は、「百五十則」等の公案体系の枠組みの中から適宜取捨選択して参禅させていたこと等を確認した。

第二章 妙心寺派の密参録文献について

まず、妙心寺派の「金屎集」・「碧前碧後」等の公案資料を調査し、網羅的な文献リストを作成した。このうち「碧前碧後」の諸写本について古則対照表を作成して検討した結果、2つの系統（A類とB類）があることが判明した。また密参録中に登場する僧名や派名を手がかりに詳細に比較検討した結果、A類の「碧前碧後」は、妙心寺四派中の東海派（悟谿宗頓下）の伝統に基づき、B類は靈雲派（特芳禅傑下）の伝統に基づいて成立した文献であることが明らかになった。しかし「碧前碧後」の中には、「碧前」と「碧後」で同一古則が重複して商量され、かつ大徳寺派の古則も含まれる文献も存在しており、こうした文献については幻住派の「碧前碧後」である可能性を指摘した。

第三章 「宗門葛藤集」の成立について

前章で明らかになった2系統の「碧前碧後」と「金屎集」・「宗門葛藤集」等の古則対照表を作成し、元禄刊本『宗門葛藤集』が東海派の「碧前碧後」の伝統を受け継いでいることを確認した。また「碧前碧後」と「金屎集」の成立関係について、新たに天文22年書写の瑞岩寺（飛騨市）蔵「金屎集」と大仙寺（岐阜県八百津町）蔵「宗門金屎集」を見出し、「宗門葛藤集」の成立を考察した。その結果、「碧前碧後」の枠組みがない瑞岩寺本と大仙寺本の「金屎集」が、「碧前碧後」のベースとなっていることが明らかになった。したがって『宗門葛藤集』の成立に至るまでの歴史的経過を示すならば、まず16世紀中頃（天文年間）までに妙心寺派の禅林において初期「金屎集」が成立し、その後『碧巖録』を軸に前後に古則を配置した「碧前碧後」が成立し、このうち東海派の伝統を受け継ぎつつ、大徳寺派等の他派の古則も取り入れたのが現行の『宗門葛藤集』（安政刊本）ということになる。

第四章 幻住派の密参禅

中世後期臨濟宗で独自の展開を遂げた幻住派の密参録は、その奇怪な公案解釈のため鈴木大拙氏が「変態禅」と呼んでいたが、こうした批判がすでに近世幻住派の懶禅玄能の『浮木集』の所説にもみられることを確認した。幻住派の密参録の特質は、「自己」と「法界」という二つの観点からの公案解釈であり、「自己」の観点からは、当該の公案について主に人間の身体の構成要素である五臓五腑や血気など、東洋医学的用語を用いて独特の公案解釈をなし、「法界」の観点からは、天地自然の構成要素と陰陽思想の概念を用いて解釈されている。こうした独特の公案商量について、筆者は吉田神道の影響に注目し、吉田兼俱と直接の関係を有していた幻住派僧の月舟寿桂の行実や著作をふまえて考察し、その影響関係について考察した。

第五章 中世禅宗における公案修行と密参録文献の諸問題

本章では秘伝的性格をもつ密参録を研究対象とすることの困難性を指摘した上で、白隠以前の公案禅について歴史的な視点からその位置づけを考察した。具体的には現在の臨濟宗で「碧前碧後」を参じる伝統があるが、これが大徳寺派・妙心寺派の「碧前碧後」の伝統に由来しつつも、両派でいわれてきた「碧前碧後」とは異なるものであることを明らかにした。また大徳寺派・妙心寺派の密参録について、同一の公案に対する下語や弁などを比較すると、密参録は実際の参禅を記録した文献というよりも、書写伝授されている場合が多いことが明らかとなった。その典型的な事例として、大徳寺派僧からキリシタンに転じたファビアンが伝えた密参と、天台僧が大徳寺派に参禅して伝えた密参とを比較すると、両者がまったく一致することを対照表で明示した。

第二部 中世禅宗の語録抄文献の研究

第一章 中世禅宗における碧巖録抄の研究

本章では『碧巖録』に対する五山派・大徳寺派・妙心寺派の抄について検討した。まず五山派の碧巖録抄としては、竺仙梵僊から岐陽方秀へ受け継がれた系統と、碧巖大抄系の写本（三本）をそれぞれ比較対照した。また林下の碧巖録抄としては大徳寺派の碧巖集古鈔について刊本と諸写本を比較検討した。その結果、大徳寺派の各抄は、先行する抄を参照し、先行する抄の下語、解釈が受け継がれており、門派の伝統の上に成立した文献であることが明らかとなった。また五山派と林下の大徳寺派・妙心寺派との関係であるが、五山派の抄は語義解釈に終始するのに対し、林下の抄は古則の精神を端的に示した著語（下語）が重視され、これが学人の境界を高めていくための役割を果たしていることを明らかにした。

第二章 碧巖録抄の諸写本について

本章はこれまでの碧巖録抄の諸写本に関する先行研究をふまえ、新たに確認された五山派と林下の碧巖録抄について紹介した。また特に妙心寺派では景聰興昂の講述（臆断）に基づく臆断系の抄が成立しているが、それぞれの序の部分と比較対照して、その系列を五類に分類した。

第三章 中世臨濟宗における臨濟録抄の研究

中世臨濟宗において成立した臨濟録抄について五山派・大徳寺派・妙心寺派の抄を各派ごとに網羅的に分類整理した上で対照表を作成し、それぞれの派ごとに独自の解釈が伝承されていることを明らかにし、語録抄の成立のあり方について考察した。

第三部 中世後期臨濟宗における入室・陞座の研究

第一章 中世臨濟宗における入室について

入室は現在の白隠禅において師家の室内に入って公案の商量をすることであるが、ここで扱う入室は、正月等の佳節、大名家の葬儀・追善供養、宮中での祝聖行事等で行われた中世大徳寺派特有の公開問答である。一則の公案に対し、首座から書記に至るまで問答が繰り返され、千利休などの茶人たちが問答に加わっていた。この入室は、有力な在家（大名等）に「見せる問答」として意義を有しており、曹洞宗における法問と共通する要素が多い。

しかし近世の白隠禅では入室が室内における入室参禅に変わっていくのであり、近世大徳寺派もその影響を受け、中世的入室の意義が見失われている事例（大心義統の所説）を紹介した。したがって養叟宗頤の南宗寺（堺）において行った五種行に含まれている入室はいわゆる入室参禅ではなく、在家も交えた公開問答であることを明らかにした。

第二章 中世禅宗における拈香・陞座について

本章では、仏事儀礼である拈香・陞座について考察した。拈香・陞座は五山派の時代、將軍をはじめ、上流武士階級の仏事として行われており、本章では、まず足利義政が文明19年から長享2年にかけて百ヶ日から三十三回忌までの逆修法要を行った資料を詳細に検討した。この五山派の拈香・陞座を検討した上で、林下の大徳寺派と妙心寺派の拈香・陞座についても考察し、具体的な儀礼作法についても紹介した。その結果、五山派寺院が次々と妙心寺派の法脈で占められていった中世末期の頃、妙心寺派僧たちはこうした五山派僧たちが行ってきた伝統を受け入れ、積極的に有力武士階級に対して仏事を行っている状況が明らかとなった。

第四部 中世禅宗の公案禅に関する新出資料の研究

第一章 東陽英朝の『堆雲夜話』について

妙心寺派臆断系の碧巖録抄にしばしば引用される東陽英朝の「堆雲夜話」なる文献は、従来その書名のみ伝えられ、その存在は不明であった（『新纂禅籍目録』では書名すら挙げられていない）。しかし、美濃大仙寺において、この写本を発見し、本章において資料紹介し、かつその文献的意義を考察した。本書は東陽英朝の上堂、小参などの正式な説示と異なり、内面を吐露するような述懐や他派への忌憚らない批判が見られ、貴重な資料といえる。

第二章 西教寺蔵大徳寺派密参録について

西教寺（天台真盛宗本山西教寺）に正教蔵なる天台聖教文庫があり、その中の「禪宗一番箱」にあった大徳寺派の密参録資料を紹介した。特に叡山焼き討ち後の復興に携わった天台僧たちが大徳寺において参禅した興味深い資料などを紹介した。

第五部 中世臨済宗の公案禪資料

碧巖密参録について大徳寺派の『玉舟和尚行巻』と『碧巖密参録 妙心寺大休派』（いずれも『碧巖集』の第1則から第10則まで）と幻住派の古則集『得魚筌』、『湖心密参録』を翻刻紹介した。

結論

以上のように中世林下の大徳寺派・妙心寺派・幻住派の公案禪に関する資料（密参録・語録抄・入室等）を中心に検討した。

まず第一部の密参録文献の考察を通して、大徳寺派・妙心寺派・幻住派の各派においてそれぞれ公案体系が存在することが明らかとなった。そして各派の密参録に示された著語（下語）とその公案解釈は、各派の伝統を受け継いでおり、密参録が相伝資料であることが対照表によって確認された。とりわけ幻住派の密参録にみる公案解釈は、吉田神道等の影響を受けた独特な公案解釈であった。また現在も臨済宗で依用される『宗門葛藤集』は、中世妙心寺派の「金屎集」に源を発し、これが近世の白隠禪に受け継がれて参究されており、白隠禪が中世臨済宗の公案禪の伝統を受け継いでいる一事例を確認することができた。

次に第二部においては、中世臨済宗の語録抄の中で、特に数多く成立した「碧巖録抄」、「臨済録抄」の写本、版本について、それぞれリストを作成して網羅的に資料紹介した上で、語録抄が各門派の伝統を踏まえて重層的に成立していることを明らかにした。その重層性は、権威ある禅僧の提唱が語録抄として伝えられ、後の禅僧がその所説をふまえて提唱することから、各門派の伝統的解釈が形成されていたことを意味する。したがって密参録と同じように公案解釈の相伝性がこれらの語録抄にも顕著であるといえる。

さらに第三部では入室と拈香・陸座という行事によって成立した文献について考察した。これらは当時の中世臨済宗の禅僧たちが祝聖、葬送・追善等の供養等を通じて、天皇家・将軍家・上級武士階級（大名ら）に関わっていったことを示す文献であった。

こうして中世臨済宗の公案禪の中で、特に林下の文献について考察したが、こうした文献群についてまとめるならば、次の表となろう。

	公開性	密伝性
出家	(文献群←叢林行事・説示形態) 上堂・小参 ←上堂・小参 入室勘辨 ←入室 語録抄 ←提唱講義 香語(下炬等) ←仏事法要 偈頌(道号頌等) 特定されず 法語 特定されず	(文献群 ←叢林行事・説示形態) 密参録 ←室内伝授
在家	陸座法語 ←仏事法要 拈香法語 ←仏事法要 偈頌(道号頌等) 特定されず 法語 特定されず	

すでに玉村竹二氏によって、中国と日本の五山派禅林において成立した文献群を区分整理し、語録の内容と形式から、①入院法語、②上堂法語、③小参法語、④秉弘法語等の13種類に分類されているが、中世禅林においては、本研究で考察した密参録や語録抄、入室といった文献は入っていない。こうした事実は本研究で考察した文献群はまさに中世後期から近世初頭にかけての特徴的に現れる文献であることを示している。

この表は、2つの観点、すなわち第一には密伝性と公開性という観点、第二には接化対象(出家と在家)の観点から中世臨済宗文献を分類し、さらに各文献が成立する前提となった説示形態・儀礼などをふまえて整理したものである。すでに筆者は『中世曹洞宗文献の研究』において中世曹洞宗の文献群について、この①密伝性と公開性の観点と、②接化対象(出家と在家)の観点から分類しているが、ほぼ同時期に対応する臨済宗の文献群についてもこうした観点からの分類は有効であるといえよう。

論文審査結果の要旨

今回、学位請求論文(論文博士)として提出された安藤嘉則氏(以下「論者」と略称)の「中世臨済宗における公案禅の研究」について審査した結果を以下の通り報告する。

I 論文の概要 - 目的とその意義 -

本論文は中世室町期に大いに発展した五山派の時代から近世の白隠禅の時代へ移行する過渡期の臨済禅において成立した文献群(語録抄・密参録・仏事法語等)を整理しつつ、それらの文献を成立させた当時の臨済宗の公案禅について解明しようとしたものである。

そこで本論文では、中世臨済宗の林下に位置づけられる大徳寺派・妙心寺派・幻住派の各派の公案関係の文献(密参録や語録抄等)を中心に、松ヶ岡文庫(鎌倉市)をはじめ、各地の寺院・資料館等に所蔵される写本をできる限り網羅的に調査し、諸写本の系統別に整理した上で、それらの文献の意義について考察している。また、入室や拈香・陸座といった出家・在家を対象とした叢林行事において、

公開的禅問答や仏事法語などを記した文献についても考察している。

これまで日本禅宗研究において、密参録・密参帳といった公案の秘訣を記した特殊な性格を有する文献を研究対象とすることはなかった。公案に参ずる者にとって、それらを扱うのは、あたかもパンドラの箱を開けるようなものであったと言える。

昭和18年(1943)に鈴木大拙(1870～1966)によって初めて密参録(特に円覚寺黄梅院の古帆周信の密参録)が紹介され、同氏はこれを変態禅として批判しているが、それに続く研究はなく、昭和49年(1974)に金田弘氏が発表した松ヶ岡文庫の抄物資料の調査目録によって、初めて密参録ないし密参帳なる文献が多数存在することが明らかとなった。こうした国語学の中世口語資料研究を皮切りに、中世禅宗史研究の立場から飯塚大展氏らが密参録を研究・紹介するに至っている。

本論文では、これらの先行研究をふまえ、中世林下の禅林を中心にどのような公案関係資料が成立していたのかを確認し、その文献的特質を検討したものである。そして、中世林下の公案禅を明らかにし得たことは、近世18世紀の白隠禅の成立を考える上でも重要な意義があったといえる。

全体の構成は論文編(第一部から第四部 47字×40行、約260頁)と資料編(第五部 62頁)よりなり、以下の各章によって構成される。

序文

凡例

第一部 中世禅宗の密参録文献の研究

第一章 大徳寺派の密参録文献について

- 一 中世臨済宗の密参禅研究の課題
- 二 大徳寺派密参録のリストについて
- 三 大徳寺派の密参禅の公案体系

第二章 妙心寺派の密参録文献について

- 一 妙心寺派の密参録について
- 二 妙心寺派密参録の写本リストについて
- 三 碧前碧後密参録について

第三章 『宗門葛藤集』の成立について

- 一 『宗門葛藤集』について
- 二 『宗門葛藤集』の諸本について
- 三 『宗門葛藤集』関係資料対照表
- 四 「碧前碧後」と「金屎集」について
- 五 瑞岩寺本・大仙寺本「金屎集」の資料的意義
- 六 元禄刊本『宗門葛藤集』と安政刊本『宗門葛藤集』
- 七 『宗門葛藤集』の公案の則数について
- 八 「金屎集」・「碧前碧後」から『宗門葛藤集』へ

第四章 幻住派の密参禅

- 一 中世禅宗における幻住派の流れ
- 二 鈴木大拙氏の密参録研究とその密参禅批判について
- 三 『浮木集』における中世幻住派に対する批判
- 四 一華碩由と幻住派の宗門三関について
- 五 湖心碩鼎の公案集・密参録について
- 六 古帆周信の密参録について
- 七 幻住派密参録の特質について
- 八 幻住派密参録と吉田神道、そして月舟寿桂について

第五章 中世禅宗における公案修行と密参録文献の諸問題

- 一 密参録文献に対するアプローチについて
- 二 「碧前碧後」の意味の変遷について
- 三 密参録文献の成立について
- 四 大徳寺派と妙心寺派の密参録の特質について
- 五 密参録文献にみられる先徳の語の引用の問題と公案解釈・著語の固定化について
- 六 妙心寺派密参録における「平」について
- 七 趙州柏樹子話に関する密参について

第二部 中世禅宗の語録抄文献の研究

第一章 中世禅宗における碧巖録抄の研究

- 一 竺仙梵僊・椿庭海寿・岐陽方秀による『碧巖録』の抄について
- 二 碧巖大抄について
- 三 中世林下の禅宗における碧巖録抄について
- 四 大徳寺派系『碧巖集古鈔』について

第二章 碧巖録抄の諸写本について

- 一 碧巖録抄の写本に関する覚書
- 二 妙心寺派系の碧巖録抄について

第三章 中世臨済宗における臨済録抄の研究

- 一 臨済録抄の各系統について
- 二 臨済録密参録の系統について

第三部 中世後期臨済宗における入室・陞座の研究

第一章 中世臨済宗における入室について

- 一 禅林における入室について
- 二 中世大徳寺派における入室の変遷
- 三 葬送儀礼における入室について
- 四 大徳寺派における入室の特質

第二章 中世禅宗における拈香・陞座について

- 一 禅宗における仏事法語
- 二 五山派の仏事法要における拈香・陞座について
- 三 林下（大徳寺派・妙心寺派）における拈香・陞座法語について
- 四 結語

第四部 中世禅宗の公案禅に関する新出資料の研究

第一章 東陽英朝の『堆雲夜話』について

- 一 東陽英朝の著作について
- 二 『堆雲夜話』の成立について
- 三 『堆雲夜話』の内容
- 四 結語

第二章 西教寺蔵大徳寺派密参録について

- 一 西教寺正教蔵について
- 二 西教寺蔵密参録における天台僧の参禅資料について

結語 中世後期から近世初頭の臨済宗の公案禅について

第五部 中世臨済宗の公案禅関係資料

資料Ⅰ 碧巖密参録

資料Ⅱ 幻住派の密参録

初出一覧

Ⅱ 各部各章の概略

第一部 「中世禅宗の密参録文献の研究」

第一章 「大徳寺派の密参録文献について」

大徳寺派の公案体系について、論者は松ヶ岡文庫に所蔵される公案関係資料のうち、大徳寺派の公案体系を明らかにした写本（ハ・1070）を見出し、その写本を手がかりに、当時の大徳寺派が参禅の対象にしていた公案群が、「百五十則」・「碧巖百則」・「碧巖類則」・「雲門百則」・「大燈百二十則」、「雑古則」であったことを明らかにしている。かつ現在松ヶ岡文庫等に所蔵される多くの大徳寺派の密参録の写本が、この大徳寺派の公案体系の枠組みに位置づけられることを確認し、諸写本を分類整理している。またこの公案の枠組みに基づいて、近世初頭の江雪宗立（1595～1666）・江雲宗龍（1598～1679）等が会下に対して行った参禅資料を見出し、実際の大徳寺派における公案参究は、「百五十則」等の公案体系の枠組みの中から選び取って参禅させていたこと等を確認している。

第二章 妙心寺派の密参録文献について

妙心寺派の公案集、密参録資料を調査し、妙心寺派には大徳寺派と異なる「金屎集」・「碧前碧後」等の公案の体系があることを明らかにし、このうち「碧前碧後」の諸写本から古則対照表を作成して

検討することにより、古則の構成・順序に二つの系統（A類とB類）があることを究明している。また密参録中に登場する僧名や派名を手がかりに詳細に比較検討した結果、A類の「碧前碧後」は、妙心寺四派中の東海派（悟谿宗頓〈1416～1500〉下）の伝統に基づき、B類は靈雲派（特芳禅傑〈1419～1506〉下）によって成立した文献であることを明らかにしている。しかし「碧前碧後」の中には、「碧前」と「碧後」で同じ古則が商量され、かつ大徳寺派の古則とその解釈の影響を受けた密参録も存在しており、こうした文献について幻住派の密参録である可能性を指摘している。

第三章 『宗門葛藤集』の成立について

本章では、前章で明らかになった二系統の「碧前碧後」と「金屎集」・『宗門葛藤集』等の古則対照表を作成し、元禄刊本の『宗門葛藤集』が東海派の「碧前碧後」の伝統を受け継いでいることを確認している。また論者自身、過去の論文において「碧前碧後」と「金屎集」の成立関係（前後関係）を考察しているが、新たに天文22年（1553）書写の瑞岩寺（飛騨市）蔵「金屎集」と大仙寺（岐阜県八百津町）蔵「宗門金屎集」を見出し、『宗門葛藤集』の成立を再考している。その結果、「碧前碧後」の枠組みの影響がない初期の「金屎集」が瑞岩寺本と大仙寺本であることが判明し、「碧前碧後」は「初期金屎集」をベースに「前」と「後」に区分された文献であることを明らかにしている。したがって『宗門葛藤集』の成立に至るまでの歴史的経過を示すならば、まず16世紀中頃（天文年間）までに妙心寺派の禅林において初期「金屎集」が成立し、その後『碧巖録』を軸に前後に古則を配置した「碧前碧後」が成立し、このうち東海派の伝統を受け継ぎつつ、大徳寺派等の他派の古則も取り入れたのが『宗門葛藤集』であることを究明している。

第四章 幻住派の密参禅

中世後期臨濟宗で独自の展開を遂げた幻住派の密参録は、その奇怪な公案解釈のため鈴木大拙が「変態禅」と呼んでいたが、こうした批判は、すでに近世幻住派の懶禅玄能の『浮木集』の所説にもみられる。幻住派の密参録の特質としては、「自己」と「法界」という二つの観点から公案解釈をするのであり、まず「自己」の観点からは、当該の公案について主に人間の身体の構成要素である五臓五腑や血気など、東洋医学的用語を用いて独特の公案解釈をなし、「法界」の観点からは、天地自然の構成要素と陰陽思想の概念を用いて解釈されている。こうした独特の公案商量について、論者は吉田神道の影響に注目し、吉田兼俱（1435～1511）と直接の関係を有していた幻住派僧の月舟寿桂（1470～1533）の行実や著作をふまえて考察し、その影響関係について考察している。また、大徳寺派・妙心寺派においては『無門関』の密参録は見出せず、幻住派は『無門関』が用いられていることが確認されると指摘している。

第五章 中世禅宗における公案修行と密参録文献の諸問題

本章では秘伝的性格をもつ密参録を研究対象とすることの困難性を指摘した上で、白隠以前の公案禅について歴史的な視点からその位置づけを考察している。具体的には現在臨濟宗では白隠禅の室内において、「碧前碧後」を参じる伝統があるが、これが大徳寺派・妙心寺派の「碧前碧後」の伝統に由来しつつも、両派で言われてきた「碧前碧後」とは異なるものであることを明らかにしている。また大徳寺派・妙心寺派の密参録について、同一の公案に対する下語や弁などを比較すると、密参録は

室内の実際の参禅を記録した文献というよりも、書写伝授されている場合が多いことを明らかにしている。たとえば大徳寺派僧からキリシタンに転じたハビアン（ファビアン、1565～1621）が伝えた密参と、天台僧が大徳寺派に参禅して伝えた密参とを比較すると、両者がまったく一致するという事例によっても明らかであるとする。

第二部 中世禅宗の語録抄文献の研究

第一章 中世禅宗における碧巖録抄の研究

本章では『碧巖録』に対する五山派・大徳寺派・妙心寺派の抄について検討している。まず五山派の碧巖録抄としては、竺仙梵僊（1292～1348）から岐陽方秀（1361～1424）へ受け継がれた系統と『碧巖大抄』系の写本三種をそれぞれ比較対照し、また林下の碧巖録抄としては大徳寺派の碧巖集古鈔について刊本と諸写本を比較検討している。その結果、大徳寺派の各抄は、先行する抄を参照し、先行する抄の下語、解釈が受け継がれており、門派の伝統の上に成立した文献であることを明らかにしている。また五山派と林下の大徳寺派・妙心寺派との関係についても、五山派の抄は語義解釈に終始するのに対し、林下の抄は古則の精神を端的に示した著語（下語）が重視され、学人の境界を高めていくための役割を果たしていることを推察している。

第二章 碧巖録抄の諸写本について

本章ではこれまでの碧巖録抄の諸写本に関する先行研究をふまえ、新たに確認された五山派と林下の碧巖録抄について紹介している。また特に妙心寺派では景聰興勗（1508～1592）の講述（臆断）に基づく臆断系の抄が成立しているが、それぞれの序の部分と比較対照して、その系列を五類に分類している。

第三章 中世臨済宗における臨済録抄の研究

中世臨済宗において成立した臨済録抄について五山派・大徳寺派・妙心寺派の抄を各派ごとに網羅的に分類整理した上で対照表を作成し、それぞれの派ごとに独自の解釈が伝承されていることを明らかにし、語録抄の成立のあり方について考察している。

第三部 中世後期臨済宗における入室・陞座の研究

第一章 中世臨済宗における入室について

入室は現在の白隠禅において師家の室内に入って公案の商量をすることであるが、ここで扱う入室は、正月等の佳節、大名家の葬儀・追善供養、宮中での祝聖行事等で行われた中世大徳寺派特有の公開問答である。一則の公案に対し、首座から書記に至るまで問答が繰り広げられ、千利休（1522～1591）などの茶人たちも問答に加わっていた。こうした入室も、基本的には白隠禅の入室に変わり、近世大徳寺派の大学匠であった大心義統（1657～1730）でさえ、入室が仏事などに行われていることの是非がわからないと発言していることは興味深いことである。この入室は、有力な在家（大名等）に「見せる問答」として意義を有しており、曹洞宗における法問と共通する要素が多い。

第二章 中世禅宗における拈香・陞座について

本章では、仏事儀礼である拈香・陞座について考察している。拈香・陞座は五山派の時代、將軍をはじめ、上流武士階級の仏事として行われており、本章ではまず足利義政（1436～1490）が文明19年（1487）から長享2年（1488）にかけて6回にわたり、百ヶ日から三十三回忌までの逆修法要を行った資料を詳細に検討している。この五山派の拈香・陞座を検討した上で、林下の大徳寺派と妙心寺派の拈香・陞座について考察し、また具体的な儀礼作法についても紹介している。五山派寺院が次々と妙心寺派の法脈で占められていった時代、妙心寺派僧たちはこうした五山派僧たちが行ってきた伝統を受け入れ積極的に仏事を行っている状況を明らかにしている。

第四部 中世禅宗の公案禅に関する新出資料の研究

第一章 東陽英朝の『堆雲夜話』について

妙心寺派臆断系の碧巖録抄にしばしば引用される東陽英朝（1428～1504）の「堆雲夜話」という文献は、その書名のみ伝えられるものの、その存在は不明であり、『新纂禅籍目録』では書名すら挙げられていなかった。しかし論者は、美濃大仙寺において、この写本を発見し・紹介し、かつその文献的意義を考察している。この『堆雲夜話』は東陽英朝の上堂、小参などの説示と異なり、本音を吐露するような述懐や他派への忌憚ない批判が見られ、貴重な資料と言える。

第二章 西教寺蔵大徳寺派密参録について

西教寺（天台真盛宗本山西教寺）に正教蔵という天台聖教文庫があり、その中の「禅宗一番箱」にあった大徳寺派の密参録資料を紹介している。特に叡山焼き討ち後の復興に携わった天台僧たちが大徳寺において参禅した興味深い資料などを紹介している。

第五部 中世臨濟宗の公案禅資料

碧巖密参録について大徳寺派の『玉舟和尚行巻』と『碧巖密参録 妙心寺大休派』（いずれも『碧巖集』の第1則から第10則まで）と幻住派の古則集『得魚筌』、『湖心密参録』を翻刻紹介している。

以上が本論文の各部各章の概要であるが、これを更にまとめて以下のごとく評価する。

第一部では、密参録文献の考察を通して、大徳寺派・妙心寺派・幻住派の各派においてそれぞれ公案体系が存在することを明らかにしている。そして各派の密参録に示された著語（下語）とその公案解釈は、各派の伝統を受け継いでおり、密参録が相伝資料であることを対照表によって確認している。中でも幻住派の密参録にみる公案解釈は吉田神道等の影響を受けた独特な公案解釈であったことを究明したことは興味深い。また現在も臨濟宗で依用される『宗門葛藤集』は、中世妙心寺派の「金屎集」・「碧前碧後」に源を発し、これが近世の白隠禅で取り上げられて参究されきたのであり、白隠禅が前の時代の伝統を受け継いでいる一事例を確認したことは新たな成果である。

第二部においては、中世臨濟宗の語録抄の中で、特に数多く成立した「碧巖録抄」、「臨濟録抄」について、あらゆる写本、版本についてそれぞれリストを作成して網羅的に紹介した上で、語録抄が門派の伝統を踏まえて重層的に成立していることを明らかにした点は、大いに評価される。その重層性

は、語録抄の元となった禅僧の提唱を踏まえて後の禅僧が提唱していることを意味するものであり、門派として伝承されてきた解釈がベースとなっており、密参録と同じように公案解釈の相伝性がこれらの資料にも顕著であることを明らかにしたことは意義深い。

さらに第三部では入室と拈香・陸座という行事によって成立した文献について考察し、これらは当時の中世臨済宗の禅僧たちが祝聖、葬送・追善等の供養等を通じて、天皇家・将軍家・上級武士階級（大名ら）に関わっていったことを示す文献であることを論じた点も、興味深い指摘である。

ただ、残された研究課題もある。今後この分野の論者の研究に希望を述べるとすれば、本論文ではその研究の中心は文献の研究、書誌的研究となっているが、「公案禅」の内容的な考察、即ち古則の理解・捉え方について、具体的には大徳寺派・妙心寺派・幻住派等による相違・特色などについて更なる研究が期待されるものである。

また、中世臨済宗における公案禅で解明すべきものとして、密参録・語録抄・仏事法要の法語のみではなく、渡来僧の語録類もあり、宗派は異なるが、曹洞宗の道元禅師の真字『正法眼蔵』や『永平頌古』もあり、これらの研究も視野にいれると有意義であると言える。また、白隠慧鶴（1686～1769）の時代には「西の古月、東の白隠」と並び称せられる古月禅材（1667～1751）の古月派の存在も大きく、この派下の公案禅も考慮に入れる必要があるのではないかと思われる。

Ⅲ 論文の評価

本論文は、「1、本論文の概要」でも述べたように、中世臨済宗の林下に位置づけられる大徳寺派・妙心寺派・幻住派の各派の公案関係の文献（密参録や語録抄等）を中心に、松ヶ岡文庫（鎌倉市）をはじめ、各地の寺院・資料館等に所蔵される写本をできる限り網羅して調査し、諸写本の系統別に整理した上で、それらの文献の意義について考察したものである。論者が調査した限りにおいて本研究に関わる現存するほぼ全ての写本を挙げて整理した業績はこれまでにない優れた業績であり多大な苦労がうかがわれる。そしてその中には新出の資料も少なからず紹介されている。加えて入室や拈香・陸座といった出家・在家を対象とした叢林行事において、公開的禅問答や仏事法語などを記した文献についても考察していることは有意義である。

論者は既に『中世禅宗文献の研究』（国書刊行会、2000年）と『中世禅宗における公案禅の研究』（国書刊行会、2011年）を公刊し、従来、研究に使用されなかった学界未知の多数の禅籍抄物や密参録や仏事法語などと呼ばれる文献を紹介して、その専門分野の開拓に資する他の追従を許さない成果となっている。

特に禅籍抄物や密参録などは、金田弘氏・柳田征司氏などによって中世国語資料のめざましい進展があり、また禅宗教団史からの成果があるが、論者は中世後期から江戸初期に残されたそれらの膨大な文献から、専らいかなる参禅形態であったか、その宗旨は何であったかを解明することに取り組んできたものである。その研究の先鞭を付けた鈴木大拙や石川力山・飯塚大展両氏などの研究成果が踏まえられていることは言うまでもない。

今回の提出論文は、後者の著書（『中世禅宗における公案禅の研究』）を公刊して以降に新たに発見紹介された初期「金屎集」の瑞岩寺本や大仙寺本を検討して、日本臨済宗で成立した公案集の『宗門葛藤集』の成立過程を解明した点は特筆すべきものといえる。その結果、日本中世を支えた五山派がやがて衰亡し、今日の主流となる近世の白隠禅の成立までの間を、見事に跡づけたと言ってよい。

先行研究によりながらも、この分野において論者自身が新たに開拓した研究業績が多く、注目すべき研究成果であり、確実に先行研究を進展させたものであり、写本資料に基づいて詳細にわたり綿密に考証・推論を展開している点は、大いに評価されるべきものである。

よって、業績審査委員全員は提出された本論文に論文博士の学位授与を「可」とするとの結論に達したことをここに報告する。

令和2年2月19日

主査 角田 泰隆

副査 石井 修道

副査 佐藤 秀孝